

2024 年度事業報告

(自 2024 年 1 月 1 日 ～ 至 2024 年 12 月 31 日)

一般社団法人日本医療薬学会

2024 年度における本学会の事業活動の主なポイントとして、以下の事項を取り上げる。

組織体制について、第 16 回定時社員総会（3 月 24 日開催）の決議を経て、役員が改選された。その後に開催された理事会での互選により、山本康次郎氏が会頭に選出され、第二期目の就任を迎えた。4 月には、各委員会も新たな組織に改編され、2026 年 3 月末日まで活動することとなった。

本学会の 2024 年度末の会員数は 14,302 名であった。正会員数は 2021 年までは増加傾向にあったが、2022 年以降は鈍化している。特に、薬局所属者は 2019 年の 627 名から 2020 年には 1,250 名へと急増したが、その後は横ばいとなり、会員数の伸びが鈍化している要因の一つとなっている。一方、学生会員は過去最大数の 296 名となった。後述するフレッシュャーズ・カンファランスが年々活性化していることが要因と思われる。

第 34 回年会は、11 月 2 日から 4 日までの 3 日間にわたり、千葉市・幕張メッセを会場として開催された。続いて、11 月 21 日から 1 月 9 日までオンデマンド配信を実施した。参加者数は 10,675 名（招待者を除く）となり、過去最大の参加数を記録し盛会に終えることができた。

第 7 回目の開催となったフレッシュャーズ・カンファランスは、6 月 15 日・16 日の両日、東京・北里大学白金キャンパスにおいて、会期を初めて 2 日間に延長して開催し、107 名の薬学生や研究初学者が演題発表を行った。フレッシュャーズによる討論を行う場として定着しつつある。また、医療薬学教育委員会との連携により、同委員会が企画したセッションでは、委員と学生が研究への取り組みや進路について意見を交わし、活発なコミュニケーションが図られた。

医療薬学誌は、創刊から第 50 巻目の発刊を迎えたが、冊子の月次発行を継続した。投稿数（119 編）および掲載数（70 編）は、前年から増加した。JPHCS 誌（英文誌）は、創刊から 10 年目を迎えた。2023 年 6 月に付与された Impact Factor は 1.0 から 1.2 に上昇した。前年の投稿数（236 編）および掲載数（81 編）は過去最高を記録した。また、海外からの投稿および掲載数も増加しており、医療薬学領域における英文論文の投稿先としての認知度や評価が高まりつつあり、今後のさらなる活性化が期待される。

専門薬剤師制度の現状として、2020 年度に発足した地域薬学ケア専門薬剤師制度や認定薬剤師制度から移行した医療薬学専門薬剤師制度など各専門薬剤師制度は、新設又は改編から 5 年目を迎えた。これに伴い、地域薬学ケア専門薬剤師制度を除く 3 つの制度では 5 年間設けられていた過渡的措置による申請および認定が終了した。各専門薬剤師の認定者数の推移について、がん専門薬剤師制度の認定者数は毎年順調に増加しているが、薬物療法専門薬剤師の認定者数は微増、医療薬学専門薬剤師および地域薬学ケア専門薬剤師の両制度の認定者数はわずかに減少している。

将来計画の検討として、学術大会実行小委員会において、年会に参加しやすい環境を整備するための検討を行った。オンデマンド併用のニーズや参加形態の変化を考慮するなど、会期短縮の可能性について議論された。これを受け、会員アンケートを実施して広く意見を収集し、その対応方針を協議することが決定された。本アンケート結果は、第 34 回年会の会頭講演で説明され、学会ホームページ（会員限定）にも掲載された。会期を 2 日間に短縮することへの賛成意見やオンデマンド配信の継続実施を希望する意見が多く見られた。しかしながら、現地での交流や直接的な意見交換などを望む意見もあり、会期の取り扱いについては、引き続き慎重に検討を進める。

会員への情報提供および一般向けの広報を担う学会ホームページをリニューアルし、12月に公開した。多様化する学会活動を適切に広報するためサイトの構造や仕様を見直し、掲載情報を充実させるとともに、会員限定ページを新設し会員利便性の向上を図った。また、スマートフォンやタブレット等マルチデバイスでの閲覧性を向上させた。

日本薬系学会連合は2024年2月に一般社団法人化した。本学会は当該法人化を含めた事業運営に会員として貢献した。

当学会の法人運営上の重要な活動の1つである2025-2026年度代議員の選出にあたり、代議員選出規程を改正して代議員推薦候補者の選任プロセスを容易にした。10月に2025-2026年度代議員候補者選挙を公示し、立候補者の受付を行った。2025年3月に当選者が決定し、選出された代議員は第17回定時社員総会の終結後から約2年間にわたり就任する。

正会員数や一部の専門薬剤師制度における認定者数の鈍化又は減少を検討課題として捉え、2025年度はそれらの要因等の分析と対策に取り組む。

2024年度事業報告の概要は以下のとおりである。

〔1〕事業の部

1. 会員数（2024年12月31日現在：14,302名、社・団体）

正会員：13,961名、学生会員：296名、名誉会員：32名、賛助会員：13社・団体

2. 医療薬学専門薬剤師制度の認定数（2025年1月1日現在）

医療薬学専門薬剤師：1,548名（前年同日の認定数：1,577名）

医療薬学指導薬剤師：833名（前年同日の認定数：846名）

医療薬学専門薬剤師研修施設：354施設（前年同日の認定数：340施設）

3. がん専門薬剤師制度の認定数（2025年1月1日現在）

がん専門薬剤師：827名（前年同日の認定数：786名）

がん指導薬剤師：382名（前年同日の認定数：351名）

がん専門薬剤師研修施設：339施設（前年同日の認定数：331施設）

4. 薬物療法専門薬剤師制度の認定数（2025年1月1日現在）

薬物療法専門薬剤師：70名（前年同日の認定数：58名）

薬物療法指導薬剤師：61名（前年同日の認定数：61名）

薬物療法専門薬剤師研修施設：261施設（前年同日の認定数：259施設）

5. 地域薬学ケア専門薬剤師制度の認定数（2025年1月1日現在）

地域薬学ケア専門薬剤師（暫定認定）：66名（前年同日の認定数：63名）

地域薬学ケア専門薬剤師（がん）（暫定認定）：148名（前年同日の認定数：157名）

地域薬学ケア専門薬剤師研修施設（基幹施設）：210施設

（前年同日の認定数：205施設）

地域薬学ケア専門薬剤師研修施設（連携施設）：176施設

（前年同日の認定数：171施設）

6. 会議・委員会開催状況

社員総会 2 回（定時・臨時 各 1 回）、定例理事会 5 回、臨時理事会 1 回、理事会事前打合せ 1 回、執行部会議 8 回、予算会議 1 回、監事監査 1 回、役員候補者推薦委員会 1 回、委員会編成打合せ 1 回、会員委員会 4 回、専門薬剤師制度運営委員会 2 回、専門薬剤師制度支援システム検討 WG2 回、専門薬剤師認定試験小委員会 4 回、医療薬学専門薬剤師認定委員会 3 回、がん専門薬剤師認定委員会 2 回、がん専門薬剤師認定委員会打合せ 1 回、がん専門薬剤師試験小委員会 3 回、がん専門薬剤師能力向上小委員会 3 回、がん専門薬剤師研修小委員会 3 回、薬物療法専門薬剤師認定委員会 3 回、薬物療法専門薬剤師認定委員会・症例 1 次審査 1 回、薬物療法専門薬剤師認定委員会打合せ 1 回、薬物療法専門薬剤師研修小委員会 2 回、薬物療法集中講義企画・運営小委員会 3 回、薬物療法集中講義企画・運営小委員会打合せ 1 回、第 1 回薬物症例書き方 WS 打合せ 6 回、地域薬学ケア専門薬剤師認定委員会 3 回、地域薬学ケア専門薬剤師委員会事前打合せ 2 回、地域薬学ケア専門薬剤師から（がん）への資格変更に係る検討 WG1 回、地域薬学ケア症例審査検討 WG の活動に係る打合せ 1 回、地域薬学ケア専門薬剤師症例審査検討 WG1 回、「地域薬学ケア専門薬剤師（副領域：がん）・症例報告の書き方セミナー」に係る打合わせ 2 回、地域薬学ケア専門薬剤師制度 2024 年度マッチング説明会事前打合せ 1 回、出版小委員会 5 回、出版物改訂に係る打ち合わせ 1 回、JPHCS 編集委員会 3 回、JPHCS 編集委員会新査読システム説明会 1 回、医療薬学編集委員会 2 回、医療薬学編集委員会事前打合せ 2 回、臨床研究推進委員会 2 回、臨床研究推進委員会事前打合せ 2 回、国際交流委員会 2 回、功績賞・振興賞選考委員会 1 回、学術関連賞選考委員会 2 回、日本医療薬学会賞等選考小委員会 1 回、医療薬学誌論文賞選考小委員会 1 回、JPHCS 誌論文賞選考小委員会 1 回、Postdoctoral Award 選考小委員会 1 回、企画・シンポジウム委員会 1 回、第 7 回フレッシュャーズ・カンファランス実行委員会 1 回、第 7 回フレッシュャーズ・カンファランス打合せ 3 回、第 8 回フレッシュャーズ・カンファランス実行委員会 1 回、第 8 回フレッシュャーズ・カンファランス事前打合せ 1 回、フレッシュャーズ活性化委員会 1 回、医療薬学学術委員会 3 回、医療薬学教育委員会 2 回、2021 年度医療薬学学術第 1 小委員会 3 回、2022 年度医療薬学学術第 2 小委員会 1 回、2022 年度医療薬学学術第 3 小委員会 1 回、2023 年度医療薬学学術第 1 小委員会 2 回、2023 年度医療薬学学術第 3 小委員会 3 回、2024 年度医療薬学学術第 1 小委員会 6 回、2024 年度医療薬学学術第 2 小委員会 2 回、2024 年度医療薬学学術第 3 小委員会 4 回、年会運営実行小委員会 2 回、年会長候補者推薦小委員会 1 回、学術大会小委員会 3 回、がん専門薬剤師研修ガイドライン改定に係る打合せ 1 回、がん専門薬剤師集中教育講座 合同協議 1 回、第 10 回がん専門薬剤師アドバンスト研修会事前打合せ 1 回、広報出版委員会 学会ホームページ ユーザーインタビュー 2 回。

7. 学術大会、医療薬学公開シンポジウム、フレッシュャーズ・カンファランス、臨床研究セミナーの活動

(1) 年会（第 34 回日本医療薬学会年会）

テーマ 『未来の医療をデザインする薬学・薬剤師の視点』

年会長 本間 真人（筑波大学附属病院 薬剤部 教授・薬剤部長）

開催日（現地） 2024 年 11 月 2 日（土）～4 日（月・祝） ※現地開催

オンデマンド配信 2024 年 11 月 21 日（木）～2025 年 1 月 9 日（木）

会 場 幕張メッセ・国際会議場・展示場、東京ベイ幕張ホール

1) 演題、協賛、参加者数

年会長講演	1 題
会頭講演	1 題
特別講演	3 題
教育講演	2 題
日本医療薬学会学会賞・学術賞・奨励賞受賞講演	7 題
Postdoctoral Award 受賞講演	10 題
年会企画シンポジウム	7 セッション (29 題)
年会企画国際シンポジウム	1 セッション (4 題)
International Symposium	1 セッション (4 題)
公募シンポジウム	61 セッション (287 題)
医療薬学会委員会企画シンポジウム	6 セッション (32 題)
その他 (他団体共催を含む)	55 セッション (255 題)
市民公開講座	1 セッション
一般演題	1, 375 題
・口頭	330 題 (うち優秀演題候補 30 題)
・ポスター	1, 045 題
International Session	21 題
・Oral	10 題
・Poster	11 題
共催セミナー	28 セッション
・メディカルセミナー	26 セッション
・ミニセミナー	2 セッション
日本薬科機器協会 ワークショップ	
企業展示 (年会企業・リクルート・書籍の各展示)	37 社

◆ 参加者数 10,749 名 (一般参加 : 10,675 名、招待参加 : 74 名)

2) 活動成果

コロナ禍を経て、第 32 回年会から現地開催を再開し、第 33 回年会では全参加登録者 10,313 名の 46%が現地参加であった。本年会においては、全参加登録者 10,749 名のうち 5,623 名 (52%) が現地参加しており、全参加登録者数および現地参加者数が共に増加した。本年会のメインテーマを「未来の医療をデザインする薬学・薬剤師の視点」とし、以下のプログラムを企画した。

特別講演 1 では、国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所の中村祐輔先生に「デジタル化・AI 化で思いやりに満ちた安全で効率的な医療を！」、特別講演 2 では、筑波大学デジタルネイチャー開発研究センターの落合陽一先生に「デジタルネイチャーと医療：新たな自然と薬学の可能性」、特別講演 3 では、筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構の柳沢正史先生に「睡眠の謎に挑む：原理の追求から社会実装まで」を講演いただいた。

教育講演 1 では、筑波大学医学医療系臨床医学域精神医学の新井哲明先生に「新規アルツハイマー型認知症治療薬の導入と課題」、教育講演 2 では、中外製薬株式会社バイオ医薬研究部の倉持太一先生に「革新的抗体技術とその応用による創薬プロジェクト創出」を講演いただいた。

年会企画シンポジウムでは、シンポジウム 1：群馬大学医学部附属病院薬剤部の山本康次郎先生と千葉大学医学部附属病院薬剤部の石井伊都子先生に「日本学術会議採択研究：患者主体的医療体制の実現とそれを支えるヘルスリテラシー教育体制を構築」、シンポジウム 2：慶應義塾大学医学部病院薬理学教室の大谷壽一先生に「薬物消化管吸収を科学する」、シンポジウム 3：医薬品医療機器総合機構審査マネジメント部の石黒昭博先生と東京大学医学部附属病院薬剤部の大野能之先生に「新薬開発と適正な情報提供のための薬物相互作用評価：レギュラトリーサイエンスの医療薬学への貢献」、シンポジウム 4：東京大学医学部附属病院薬剤部の高田龍平先生との熊本大学病院薬剤部城野博史先生に「薬学・薬剤師の視点から近未来の医療を考えよう」、シンポジウム 5：新潟大学医歯学総合病院薬剤部の外山聡先生と東北大学病院薬剤部の眞野成康先生に「薬剤業務向上加算の新設の背景と今後の展開」、シンポジウム 6：和歌山県立医科大学薬学部の江頭伸昭先生と東京理科大学薬学部の礒濱洋一郎先生に「保険診療における漢方薬の役割と新たなエビデンスの創出」、シンポジウム 7：京都大学医学部附属病院薬剤部の寺田智祐先生と秋田大学大学院医学系研究科薬物動態学の三浦昌朋先生に「ファーマコゲノミクス検査の最新動向～臨床実践に向けた課題と展望～」を企画いただき、それぞれ活発に討論いただいた。

年会企画国際シンポジウムでは、東京薬科大学薬学部臨床薬理学教室の鈴木賢一先生と埼玉医科大学国際医療センターの牧野好倫先生に「がん化学療法の未来を変える臨床薬学研究のススメ」を企画いただき、がん医療の質の向上を目指した薬学的視点から発案する研究の重要性や臨床的意義について、他国の薬剤師も交えて活発に討論いただいた。

公募シンポジウム（134 件の応募）は、選考委員の評価により 61 件を採択した。本学会の委員会企画として、がん専門薬剤師認定委員会、臨床研究推進委員会、薬物療法集中講義企画・運営小委員会、JPHCS 委員会、医療薬学学術第 2 および第 3 小委員会から 6 つのシンポジウムが企画された。また、国際交流委員会から International Symposium として、「Designing the Future of Pharmacotherapy」が企画され、アジア諸国における薬物療法の現状等について活発に討論いただいた。

一般演題（1,390 題の応募）は、最終的に、口頭発表：330 題（うち優秀演題候補 30 題）、ポスター発表：1,045 題の合計 1,375 題を採択した（不採択：8 題、取り下げ：7 題）。例年通り優秀演題の選考を行い、候補 30 題から 7 題を選出した。また、International Session として、21 題（Oral：10 題、Poster：11 題）の英語発表が行われ、海外からも発表いただいた。国際交流委員会での審査の結果、International Session Award として Oral 発表から 2 題を選出した。優秀演題および International Session Award 受賞者の 9 名には、年会 2 日目の懇親会において表彰式を執り行い、表彰状と記念品を授与した。なお、公募シンポジウムの選考評価、優秀演題のノミネート選考、優秀演題の選考にご協力いただきました各種選考委員の各位に感謝申し上げます。

その他、「患者と医療者が協働する未来の医療」と題して市民公開講座を企画し、認定 NPO 法人ささえあい医療人権センターCOML の山口育子先生に講演いただいた。メディカルセミナーが 26 セッション、ミニセミナーが 2 セッション開催された。

本年会では、コロナ禍後、初めて懇親会を開催した。年会 2 日目に TKP 東京ベイ幕張ホールで開催され 262 名が参加し、活発に意見交換いただいた。

各種認定の研修として、本学会の医療薬学専門薬剤師、がん専門薬剤師、薬物療法専門薬剤師、地域薬学ケア専門薬剤師の単位の発行を、日病薬病院薬学認定薬剤師制度では、セッション毎の単位発行とし、該当セッションについては現地参加、LIVE 配信、後日オンデマンド配信といずれの参加形式でも取得できるようにした。なお、現地参加での単位取得では、当日該当セッション会場にて QR コードを使用した入退室管理を行った。日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師制度集合研修単位については、研修単位の管理運営上の問題から、現地参加者のみの取得とした。

年会期間中の LIVE 配信については、最大視聴者数が 1 日目 450 名、2 日目 400 名、3 日目 170 名であった。2024 年 11 月 21 日（木）～2025 年 1 月 9 日（木）に行ったオンデマンド配信はトラブルなく終了し、配信期間中で視聴アクセスが最も多かったのは 1 月 8 日の 12,490 件であった。

本年会の準備にあたっては、会場費の高騰やランチョンセミナー協賛の減少に対応するため、新たな協賛手段の追加（例：幕間動画、リクルートブース展示、ミニセミナー）や、運営会社との予算削減の検討（会場の縮小、ライブ配信会場の縮小、プログラム集の事前送付を取りやめ当日配布による冊数削減）を行った。また、第 32・33 回年会よりも現地参加者が多く見込まれたため、参加者への QR コード準備の事前連絡、ネームカード出力コーナーの複数設置、日本薬剤師研修センター研修単位受付を展示ホールに移設、クロークの拡大、誘導人員の配置などを行った。その結果、当日は参加者が長時間待つことなくスムーズに受付等の対応ができた。日病薬病院薬学認定薬剤師制度の研修単位については、今年から運用開始された研修支援システム（HOPES）に対応するため、早い段階から調査・確認を行い、円滑に準備を進めることができた。

大会の準備段階でなかなか企業協賛が集まらず、当初の計画を変更せざるを得なかったこと、大会初日に、山陽新幹線の運行が止まり、一般講演のポスター発表辞退等もあったことなどの問題もあったが、それ以外は大きな混乱もなく第 34 回年会を盛会のうちに終えることができた。これは、本学会理事会をはじめとする役員や事務局各位のご支援と、組織委員・実行委員・年会事務局（筑波大学附属病院薬剤部）・運営事務局（JTB コミュニケーションデザイン）など本年会開催に関わった各位様のご尽力、また参加者およびご協賛企業のご理解とご協力の賜物であり、こころより感謝申し上げる次第である。

(2) 医療薬学公開シンポジウム

1) 第 93 回医療薬学公開シンポジウム

テーマ 地域医療における医療 Dx の推進に向けて

実行委員長 北原 隆志（山口大学医学部附属病院）

開催日 2024 年 8 月 3 日（土）

開催地 山口県宇部市、山口大学医学部医修館 第 1 講義室

開催形式 現地開催

特別講演

座長：山口大学医学部附属病院 教授・薬剤部長 北原 隆志

「DI 業務における医療 Dx の波 どの様な波が来るのか？ その波の乗り方は？」

福井大学医学部附属病院 教授/薬剤部長 後藤 伸之
シンポジウム「地域における医療 Dx を推進するために」

座長：徳山中央病院 薬剤部 佐藤 真也

山口大学医学部附属病院 薬剤部 岡田 直人
基調講演「DX 時代の地域医療：これからの薬剤師のための基礎知識」

九州大学病院メディカルインフォメーションセンター 高田 敦史
「周南地区の電子処方箋開始までの活動報告」

徳山中央病院 薬剤部 菅 香理
「電子処方箋運用に向けた薬局での対応について」

山口県薬剤師会 常務理事 河田 尚己
「大学教育が拓く医療の未来：地域の医療 Dx を支える薬剤師の育成」

山口東京理科大 相良 英憲

◆参加者数 82 名

2) 第 94 回医療薬学公開シンポジウム

テーマ 地域医療・在宅医療を支える薬剤師の専門性

実行委員長 崔 吉道（金沢大学附属病院）

開催日 2024 年 10 月 6 日（日）

開催地 石川県金沢市、金沢大学附属病院 宝ホール

開催形式 現地開催

特別講演

「2040 年を見越した地域医療における戦略とマネジメントー未来の薬剤師、そのあるべき姿を考えるー」

日本経済大学大学院 教授 赤瀬 朋秀

シンポジウム「薬剤師が進める地域医療連携と卒後教育」

座長：石川県病院薬剤師会 会長 森戸 敏志、石川県薬剤師会 副会長 橋本 昌子

「石川県における地域医療推進について」

石川県健康福祉部地域医療推進室次長 細木 信哉

「患者のケア移行における連携の推進と卒後教育」

市立敦賀病院 副院長 荒木 隆一

「地域医療における薬剤師の職能発揮ー地域薬学ケア専門薬剤師の在宅医療への関わりー」

太平寺らいふ薬局 中川 友之

「超高齢社会における薬剤師の果たすべき役割ーその人の人生に寄り添うケアを考えようー」

株式会社スパーテル 代表取締役 橋本 昌子

「地域医療における今後の薬剤師の在り方」

株式会社日本総合研究所調査部 主任研究員 成瀬 道紀

総合討論

◆参加者数 77 名

3) 第 95 回医療薬学公開シンポジウム

テーマ アドバンスケアプランニング（ACP）を学び地域で展開しよう

実行委員長 長谷川 豊（市立貝塚病院）

開催日 2024 年 10 月 26 日（土）

開催地 大阪府貝塚市、貝塚市民文化会館コスモスシアター

開催形式 現地開催

講演一部

座長：神戸薬科大学 総合教育研究センター 臨床特命教授 河本 由紀子

講演 1 「臨床現場での ACP～Good Life から Good Death へ」

公益財団法人田附興風会医学研究所 北野病院 緩和ケア科部長 梶山 徹

講演 2 「薬剤師が関わる意思決定支援の実際」

公立大学法人敦賀市立看護大学 薬理学教授 岡本 禎晃

講演二部

座長：神戸大学医学部附属病院 名誉教授 平井みどり

講演 3 「在宅療養の場での ACP の支援 ～訪問看護師の立場から～」

神戸大学大学院医学研究科先端緩和医療学講座 医学研究員（がん看護専門看護師） 藤原 由佳

講演 4 「「ACP」への「ABC」 ～そのひとらしく、あなたらしく～」

彦根市立病院緩和ケア科 非常勤医師 田村 祐樹

◆参加者数 37 名

4) 第 96 回医療薬学公開シンポジウム

テーマ 薬学・薬剤師の医療と地域社会への貢献

実行委員長 賀川 義之（静岡県立大学）

開催日 2024 年 11 月 10 日（日）

開催地 静岡県静岡市、静岡県立大学草薙キャンパス看護学部棟 13411 講義室

開催形式 現地開催

シンポジウム 1 薬剤師の地域偏在解消に向けて

座長：静岡県立大学 薬学部 内田 信也

「未来の地域医療を支える薬剤師の輩出と育成を目指して－地域の魅力的な医療を教育に活かす－」

特定医療法人生仁会須田病院 薬剤部長 定岡 邦夫

「和歌山県立医科大学薬学部の地域医療薬学教育の取り組み～県内枠選抜学生の教育～」

和歌山県立医科大学 薬学部教授 須野 学

「薬学部上級生と下級生が合同した静岡県加茂地区での地域医療実習の試み」

静岡県立大学 薬学部教授 内田 信也

総合討論

シンポジウム 2 臨床薬学研究による医療への貢献

座長：静岡県立大学 薬学部 内野 智信

「地域薬局薬剤師、臨床研究ははじめました」

やまうち薬局 鈴木 寛

「総合病院における実臨床からの臨床研究への取り組み」

静岡県立総合病院薬剤部 中條 倫成

「特定機能病院でリサーチマインドを持った臨床薬剤師として働くということ」

浜松医科大学医学部附属病院薬剤部 鈴木 光路

「公立病院で取り組む臨床薬学研究」

静岡県立大学薬学部 横山 匡

特別講演

座長：静岡県立大学 薬学部 賀川 義之

「医療リアルワールドデータを用いた臨床薬学研究による医療への貢献」

京都薬科大学 薬学部臨床薬剤疫学分野教授 村木 優一

◆参加者数 95 名

(3) 第 7 回フレッシュャーズ・カンファランス

開催日 2024 年 6 月 15 日（土）～16 日（日）

実行委員長 根岸健一（北里大学薬学部 教授）

会 場 北里大学 白金キャンパス

演題数 口頭発表 59 題、ポスター発表 48 題

教育講演 「病院薬剤師としての医療薬科学研究」

東京大学医学部附属病院 薬剤部 教授/薬剤部長 高田 龍平

◆参加者数 284 名

(4) 第 4 回臨床研究セミナー

テーマ 臨床研究を着想し、発表しよう

開催日 2024 年 4 月 14 日（日）

会 場 大崎ブライトコアホール

開催形式 ハイブリッド開催（現地、オンライン：ライブ配信）

特別講演 1

座長：鈴木 小夜（慶應義塾大学薬学部）

「日常業務を臨床研究へと発展させるには ーその有意差、意味ありますか？ー」

横浜薬科大学・客員教授 奥田 千恵子

特別講演 2

座長：宮崎 長一郎（宮崎薬局）

「質的研究とは？ ー数値化されていないデータをどう扱うのかー」

帝京平成大学薬学部・教授 菊地 真実

シンポジウム

「医薬品適正使用のためのエビデンスの創出～私の実践例：苦労と工夫～」

座長：中村 任（大阪医科薬科大学薬学部）、山口 浩明（山形大学医学部附属病院薬剤部）

「薬局薬剤師による論文執筆活動とその意義 ～在宅医療業務の実態調査から地域医療への貢献を発信する～」

かがやきクリニック/かがやき在宅診療所 小林 星太

「病棟常駐薬剤師による医薬品適正使用の推進と治療効果の向上」

旭川医科大学病院薬剤部 山田 峻史

「有害事象自発報告データベースを用いた研究 ～研究の着想から論文化まで～」

三重大学医学部附属病院 薬剤部白石 ちひろ

「日常業務から社会課題解決型エビデンスを創出する－薬・薬連携、地ケア・回リハの病棟業務、医療安全向上の取り組みをふまえて－」

国立病院機構三重中央医療センター薬剤部 鈴木 亮平

◆参加者数 223 名（現地参加：21 名、オンライン参加：202 名）

8. 各委員会活動

(1) 企画・シンポジウム委員会

1) 医療薬学公開シンポジウムの開催

第 93 回から第 96 回までの 4 回の医療薬学公開シンポジウムの開催および開催支援を行った。

2) 2025 年度の医療薬学公開シンポジウムの開催方法・計画の検討

2025 年度の公開シンポジウム 4 回の（第 97 回から第 100 回）の開催地、実行委員長の各候補などを検討し、以下のとおり決定した。（順不同）

- ・ 長野県： 滝澤 康志（飯山赤十字病院）
- ・ 三重県： 岩本 卓也（三重大学医学部附属病院）
- ・ 和歌山県： 中川 貴之（和歌山県立医科大学附属病院）
- ・ 岡山県： 座間味 義人（岡山大学病院）

(2) フレッシュャーズ活性化委員会

1) 第 7 回フレッシュャーズ・カンファランスを開催した。

2) 第 8 回フレッシュャーズ・カンファランスの実行委員長を決定し、開催計画を検討した。

- ・ 実行委員長 西口工司（京都薬科大学 教授）
- ・ 開催予定日 2025 年 6 月 21 日（土）、22 日（日）
- ・ 会場 京都薬科大学（京都市山科区）
- ・ 開催形式 現地開催

(3) 医療薬学編集委員会

1) 「医療薬学」第 50 巻 1 号～12 号を編集・発行した。

① 第 50 巻には 70 編の論文を掲載した。（前年の掲載数は 44 編）。

内訳：一般論文 23 編、ノート 45 編、ミニレビュー 2 編（うち英文論文は 3 編）

② 第 50 巻の毎号に専門薬剤師リレーエッセイを掲載した。

③ 2024 年 1 月から 12 月までに 119 編（うち非学会員から 10 編）の論文投稿を受付け、63 編を採択した。（前年の投稿数は 90 編）

④ 見かけの採択率は 53%であった。

2) 投稿規定を改訂し、論文種別・症例報告の解説を見直した。

3) 論文の速やかな公開を目的として、第 51 巻 1 号より掲載号の発行日と同日に J-STAGE 上での公開を開始した。

4) 編集手引き、査読者の増加策などの編集体制の充実化に関する検討を行った。

(4) JPHCS 編集委員会

1) 英文誌 Journal of Pharmaceutical Health Care and Sciences (JPHCS) の第 10 巻 (2024 年) をオンラインで発行した。

① 第 10 巻には 81 編の論文を採択して掲載した。(前年の掲載数は 50 編)

内訳: Research article 58 編、Case report 11 編、Short Report 9 編、Review 3 編

② 2024 年 1 月から 12 月までに 236 編の論文投稿を受付けた。(前年の投稿数は 152 編)

内訳: Research article 183 編、Case report 26 編、Review 13 編、Short report 14 編

③ 見かけの採択率は 33% であった。

2) 投稿数が非常に増加している現状に鑑み、委員が不足している領域を中心に、2024 年 11 月 1 日より本委員会委員として 5 名を追加委嘱した。

3) 2024 年 11 月より査読投稿システムが Springer 社の自社システムに移行された。この移行に伴い、Article type の「Research Article」が「Research」に変更、「Short Report」が「Brief Report」に変更された。

4) 2024 年発表の Impact Factor として 1.2 を取得した。(前年は 1.0)

5) 新しい論文投稿システムへの移行に併せて、投稿書式、引用文献用のスタイルを作成し、掲載した。

6) 論文の掲載・公開情報を、定期的に会員に周知することとした。

7) 第 34 回年会にて、「JPHCS 委員会企画 医療薬学会の英文誌を盛り上げよう」というシンポジウムを行った。

(5) 専門薬剤師制度運営委員会

1) 各専門薬剤師制度間の整合化や情報の共有

各専門薬剤師認定制度の規程、細則の改正に関わる事項の検討、会頭からの諮問事項に関する確認と検討、2025 年度の各制度の申請スケジュール等を整理した。

2) 小委員会の活動

① 薬物療法集中講義企画・運営委員会

2024 年専門薬剤師認定取得のための薬物療法集中講義をオンラインで開催した。

配信期間: 2024 年 7 月 1 日(月)～8 月 30 日(金)

参加者数: 720 名

② 専門薬剤師認定試験小委員会

2024 年専門薬剤師認定試験の問題を作成し実施した。

試験日 2024 年 7 月 21 日(日)

受験者数 42 名、合格者数 36 名、合格率 85.1%

③ 専門薬剤師制度支援システム検討 WG

専門薬剤師制度支援システムの構築を進め、2024 年度薬物療法専門薬剤師の更新申請にて試験的に稼働させた。

(6) 医療薬学専門薬剤師認定委員会

1) 新規認定および更新認定は、次の通り

① 医療薬学専門薬剤師: 新規認定(正規)31 名、新規認定(暫定)28 名、

暫定から正規への移行 13 名、更新認定 192 名、更新保留 3 名

② 医療薬学指導薬剤師：新規認定 26 名、更新認定 95 名、更新保留 1 名

③ 医療薬学専門薬剤師研修施設：新規認定 41 施設（基幹 29 施設、連携 12 施設）、
更新認定 37 施設（基幹施設）

2) 医療薬学専門薬剤師認定制度規程細則のうち、申請書の書式の検討を開始した。

3) 会頭の諮問を受け医療薬学専門薬剤師の社会貢献、資質、能力に関する議論を開始した。

(7) がん専門薬剤師認定委員会

1) 新規認定および更新認定は、次の通り。

① がん専門薬剤師：新規認定 61 名、更新認定 150 名、更新保留 11 名

② がん指導薬剤師：新規認定 41 名、更新認定 136 名

③ がん専門薬剤師研修施設：新規認定 37 施設（基幹 26 施設、連携 11 施設）
更新認定 166 施設（基幹施設）

2) 教育啓発活動として、第 34 回年会でシンポジウムを開催、日本病院薬剤師会との合同でがん専門薬剤師集中教育講座をオンラインで開催、および日本薬学会第 144 年会においてシンポジウムを共催、がん専門薬剤師全体会議はハイブリッドで開催した。症例のスキルアップセミナー、アドバンスト研修会はそれぞれ 2 月にオンラインで開催した。

3) 小委員会の活動

① がん専門薬剤師試験小委員会

2024 年がん専門薬剤師認定試験の問題を作成し実施した。

試験日 2024 年 6 月 22 日（土）

受験者数 76 名、合格者数 63 名、合格率 82.9%

② がん専門薬剤師研修小委員会

i) がん専門薬剤師集中教育講座をオンラインで開催した。（日本病院薬剤師会と共催）

配信期間 2024 年 11 月 1 日～2024 年 12 月 20 日

参加者数 2,561 名

ii) 他学会が実施する講習会・教育セミナーの受講単位を認定した。

iii) がん専門薬剤師養成研修ガイドラインおよびコアカリキュラムを更新した。

iv) 第 3 回がん介入症例の書き方スキルアップセミナーをオンラインで開催した。

開催日 2024 年 2 月 10 日（土）

参加者数 26 名

③ がん専門薬剤師能力向上小委員会

i) 第 10 回がん専門薬剤師アドバンスト研修会をオンラインで開催した。

開催日 2024 年 2 月 17 日（土）

参加者数 32 名

ii) 第 11 回がん専門薬剤師全体会議をハイブリッド形式で開催した。

開催日 2024 年 5 月 11 日（土）

開催地 横浜市

参加者数 現地 119 名、オンライン 336 名

(8) 薬物療法専門薬剤師認定委員会

1) 新規認定および更新認定は、次の通り。

- ① 薬物療法専門薬剤師：新規認定 18 名、更新認定 5 名
- ② 薬物療法指導薬剤師：新規認定 3 名、更新認定 6 名
- ③ 薬物療法専門薬剤師研修施設（基幹施設）：新規認定 16 施設、更新認定 8 施設

2) 第 1 回症例報告の書き方ワークショップを開催した。

開催日 2024 年 8 月 4 日（日）

会 場 日本薬学会長井記念ホール

参加者数 15 名

(9) 地域薬学ケア専門薬剤師認定委員会

1) 新規認定は、次の通り。

- ① 地域薬学ケア専門薬剤師：新規暫定認定 3 名
- ② 地域薬学ケア専門薬剤師（がん）：新規暫定認定 5 名
- ③ 地域薬学ケア専門薬剤師研修施設：新規認定 21 施設（基幹 16 施設、連携 5 施設）

2) 地域薬学ケア専門薬剤師制度における連携研修マッチングに係る全国説明会（オンライン）を、日本薬剤師会および各都道府県薬剤師会と協力して開催した。

3) 各都道府県薬剤師会と連携して、連携研修のマッチングを実施した。

4) 地域薬学ケア専門薬剤師暫定認定が正規認定に移行する際の運用や要件等を検討した。

5) 地域薬学ケア専門薬剤師研修小委員会の活動

- i) 地域薬学ケア専門薬剤師（がん）の症例報告の書き方セミナーをオンラインで開催した。開催後には、オンデマンド配信を行った。

開催日 2024 年 11 月 19 日（火）

参加者数 155 名

- ii) 他団体の講習会について、単位申請を受け付けて審査を実施した。

6) 地域薬学ケア専門薬剤師症例審査検討WGの活動

地域薬学ケア専門薬剤師（がん）の症例審査のための審査体制や基準作りを進めた。

(10) 医療薬学教育委員会

1) 第 7 回フレッシュャーズ・カンファランスでの企画・運営

カンファランス 2 日目に学会への参加や発表する意義に関する基調講演（2 名）および参加者間や委員と交流できる委員会企画を実施した。

2) 第 8 回フレッシュャーズ・カンファランスでの企画検討

2025 年 6 月実施のカンファランス内で学会活動に継続的に参加し、参加者間や委員と交流できるような委員会企画を検討した。

(11) 国際交流委員会

1) 第 34 年会における英語セッションの企画

年会 1 日目である 2024 年 11 月 2 日（土）に国際シンポジウムおよびセッション等の企画等を行った。

・International Symposium『Designing the Future of Pharmacotherapy』を企画・運営した。中国、韓国、台湾、日本から各 1 名の講師による講演が行われた。

- ・ International Session (Oral) 1, 2 を企画・運営し、10 題の英語による口頭演題が行われ、2 題の Award の選考を行った。

- ・ International Session (Poster) のプログラムを編成し、11 題の英語による口頭演題が行われた。

- ・ 国際交流会を開催した。（参加者 日本側：国際交流委員 6 名、海外：韓国 12 名、台湾 1 名、中国 1 名）

2) 海外研修等制度について

- ・ 2024 年度海外研修等助成員の募集を 3 期に分けて実施したが、応募がなかった。

- ・ 海外研修等助成規程を改訂し、研修助成額の上限を 30 万円から 50 万円に引き上げた。

(12) 医療薬学学術委員会

1) 各医療薬学学術小委員会の活動

① 2022 年度医療薬学学術第 1 小委員会（鈴木賢一委員長）（2022 年 6 月～）

研究テーマ「病院・薬局薬剤師がシームレスで行う、がん薬物治療の副作用マネジメント支援体制の構築」

- ・ 2023 年度に実施したアンケート調査結果の論文化を予定していたが、アンケート内容や IRB への対応に関して、不十分と判断。そのため、アンケート内容の練り直し、IRB への対応などを補完した上で 2025 年度に向けた調査研究を実施するために、東京都薬剤師会、東京都病院薬剤師会等と連携し、研究計画書の作成中

- ・ 次期調査研究では、薬局薬剤師によるがん薬物治療の有害事象評価の質向上を目指すとともに、トレーシングレポートを通じて薬局薬剤師からの情報を効率的に有効利用できる運用開発を計画

② 2022 年度医療薬学学術第 2 小委員会（舘知也委員長）（2022 年 6 月～）

研究テーマ「WITH/POST 新型コロナウイルス時代のオンライン研修教育のあり方」

- ・ 薬剤師のための効果的なオンライン研修のあり方（一方向型オンライン研修教育と同時双方型オンライン研修教育のメリットおよびデメリットを含む）を整理し、明確化

- ・ 「薬剤師のための効果的なオンライン研修のあり方ガイドブック」を作成・発刊し、第 34 回年会シンポジウムで配布

- ・ 薬剤師のための効果的なオンライン研修のあり方を基盤とした同時双方向型オンライン研修教育（セミナーおよびワークショップ）のモデル例を構築した。構築した研修教育を実施し、その形成的評価を実施（2024 年 2 月に実施）

- ・ 本小委員会の研究活動に関する論文を医療薬学誌に投稿し、採択（2025 年 3 月掲載予定）

③ 2022 年度医療薬学学術第 3 小委員会（矢野良一委員長）

研究テーマ「症例検討による省察の推進と教育への展開を目指した調査研究」

- ・ 医療関連職の教育・研修における症例検討会の位置づけを取り扱った研究の世界的な動向をレビュー

- ・ 薬剤師による症例検討会の実態とその認識を明らかにするため、本学会員所属施設および会員個人を対象としたアンケート・実地・インタビュー調査を計画（第 33 回年会にて発表、論文の執筆中）

④ 2023 年度医療薬学学術第 3 小委員会（百賢二委員長）（2023 年 6 月～）

研究テーマ「院内製剤の全国実態調査と医療ビッグデータを用いた医薬品開発シーズの探索」

- ・第 34 回年会において、臨床製剤に関するシンポジウムを行い、臨床製剤に関する課題や、具体的な製剤に関する情報の共有を実施
- ・日本緩和医療薬学会および日本医薬品安全性学会のシンポジウムで臨床製剤に関する状況を議論
- ・日本薬剤学会年会にて、本研究成果の一部である粉末化調剤の実態について発表し、製薬企業の製剤研究所の研究者と議論を実施

⑤ 2024 年度医療薬学学術第 1 小委員会（岩尾一生委員長）（2024 年 4 月～）

研究テーマ「医歯薬連携による薬剤関連顎骨壊死の副作用報告体制の構築」

- ・本学会会員の病院診療所薬剤師が所属する 1,652 の医療機関を対象とし、薬剤関連顎骨壊死（MRONJ）に係る副作用報告や救済制度の実態把握のためのアンケート調査案を作成し、本学会理事会の承認取得（2024 年 12 月）
- ・現在、倫理審査委員会を受審中。承認 1 ヶ月以内に調査を実施予定
- ・副作用報告や救済給付の申請を適正に行うための各種制度に関する勉強会について検討。小委員会構成委員の所属施設に勤務する薬剤師・医師・歯科医師・歯科衛生士を対象、開催方法は WEB 形式とし、独立行政法人 医薬品医療機器総合機構（以下、PMDA）の出前講座を利用することを決定

⑥ 2024 年度医療薬学学術第 2 小委員会（大野能之委員長）（2024 年 4 月～）

研究テーマ「医療現場における適正な薬物相互作用マネジメントのための包括的基盤の構築」

- ・医療薬学フォーラム 2024／第 32 回クリニカルファーマシーシンポジウム（2024. 7. 7、熊本）において、本小委員会共同企画として、シンポジウム「サイエンスに基づいた薬物相互作用マネジメントを実践しよう」を開催し、薬局薬剤師の演者も含めて、医療現場でサイエンスに基づいた薬物相互作用マネジメントを実践するためには何が必要かの議論を実施
- ・第 34 回年会において、本小委員会との共催として、年会企画シンポジウム 3「新薬開発と適正な情報提供のための薬物相互作用評価：レギュラトリーサイエンスの医療薬学への貢献」を開催し、製薬企業や PMDA の演者も含めて、新薬開発と適正な情報提供のための薬物相互作用評価のためには何が必要かの議論を実施
- ・上記の議論も踏まえて、薬物相互作用マネジメントを支援するための資料として、ガイドラインに基づいて強度分類した代謝酵素やトランスポーターの阻害薬、誘導薬および基質のリスト（DMPK. 2021. 100414）の情報のアップデートを実施、かつ医療現場でより活用しやすい形式にした本小委員会オリジナルのリストとして「代謝酵素（P450 分子種）およびトランスポーターを介する相互作用において留意すべき薬物のリスト-第 1 版-」を作成。本学会ホームページに掲載予定

⑦ 2024 年度医療薬学学術第 3 小委員会（清宮啓介委員長）（2024 年 4 月～）

研究テーマ：生成系 AI の薬剤師業務への応用に関する実態、課題やニーズの調査

- ・生成系 AI の活用状況について本学会の会員が所属する施設および各会員を対象としてアンケート調査を実施すべく、施設向けおよび各薬剤師向けのアンケートにつ

いて協議の上、質問項目を決定し、WEB アンケートを作成、倫理委員会の承認を取得
・2025 年 1 月 7 日より、本学会ホームページ上にアンケート依頼文書を掲載し、回答
の収集を開始

2) 2025 年度に向けた医療薬学学術小委員会の新規募集

2025 年 4 月（予定）より発足する医療薬学学術小委員会の研究テーマを以下のように設定し、公募手続を進めた。

①本学会として取り組むべき、または推進すべき活動

（例）薬剤師職能・専門性の将来展開と学術的基盤の醸成、他学会等との連携推進、研修教育・情報共有のあり方、地域医療連携など

②各領域、疾患群における臨床薬学のエビデンス構築につながる活動

（例）プレジジョン・メディシンに関する研究、PBPM を活用したアウトカム・エビデンス、処方箋鑑査・疑義照会のチェックポイントマニュアル作成のための活動など

③多施設共同研究、分野連携型の医療薬学研究の基盤整備に関する活動

（例）患者レジストリーのシステム整備、トランスレーショナルリサーチ及びリバーstransレーショナルリサーチの体制整備、医療ビッグデータの利活用など

④医療 DX 推進に関する活動

（例）電子処方箋に関する調査研究、電子化された添付文書の活用、IoT の利活用に関する調査研究、電子データの標準化・共有化に関する調査研究など

⑤患者主体的医療体制の実現とそれを支えるヘルスリテラシー教育体制を構築

（例）幼児・学童向けの医薬品情報提供資材作成による理解度深化、講習会を介した医薬品理解向上のための取り組み、地域連携等

(13) 臨床研究推進委員会

1) 第 4 回臨床研究セミナーをハイブリッド形式で開催した。

テーマ 臨床研究を着想し、発表しよう

開催日 2024 年 4 月 14 日（日）

会場 大崎ブライトコアホール

特別講演 1

座長：鈴木 小夜（慶應義塾大学薬学部）

「日常業務を臨床研究へと発展させるには ーその有意差、意味ありますか？ー」

横浜薬科大学・客員教授 奥田 千恵子

特別講演 2

座長：宮崎 長一郎（宮崎薬局）

「質的研究とは？ ー数値化されていないデータをどう扱うのかー」

帝京平成大学薬学部 教授 菊地 真実

シンポジウム「医薬品適正使用のためのエビデンスの創出～私の実践例：苦労と工夫～」

座長：中村 任（大阪医科薬科大学薬学部）、山口 浩明（山形大学医学部附属病院薬剤部）

「薬局薬剤師による論文執筆活動とその意義 ～在宅医療業務の実態調査から地域医療への貢献を発信する～」

かがやきクリニック/かがやき在宅診療所 小林 星太

「病棟常駐薬剤師による医薬品適正使用の推進と治療効果の向上」

旭川医科大学病院薬剤部 山田 峻史

「有害事象自発報告データベースを用いた研究 ～研究の着想から論文化まで～」

三重大学医学部附属病院薬剤部 白石 ちひろ

「日常業務から社会課題解決型エビデンスを創出する 一薬・薬連携、地ケア・
回りハの病棟業務、医療安全向上の取り組みをふまえて」

国立病院機構三重中央医療センター薬剤部 鈴木 亮平

◆参加者数 223 名（現地参加：21 名、オンライン参加：202 名）

2) 第 5 回臨床研究セミナーの開催に向けて、臨床研究推進を支援するための方策を検討した。

i) 開催方法・場所・日時

2025 年 4 月 20 日（日）にオンライン配信（ライブおよびオンデマンド）にて実施することとした。

ii) テーマの検討

受講対象者として、初学者および初学者を指導する人を念頭にすることが確認された。テーマとしては、研究に着想し、倫理委員会を通して論文を執筆するまでに至るような研究デザインが作成できることを意識する。

iii) 講師

専門性の高い大学教員などによって難易度が高すぎない初学者向けの講義となるようなプログラム構成にすることが決定した。

iv) 本セミナー受講者のアウトカムの確認

開催日当日のセミナーに対するアンケートだけでなく、セミナー受講者がその後、実際に臨床研究を開始したかについて後日アンケートを取ることもとなった。

vi) オンデマンド配信について

例年、本セミナーの開催当日の受講確認ができた者のみが獲得できた受講単位を、次のセミナーよりオンデマンドのみの受講者であっても獲得できるようにすることを検討した。

(14) 広報・出版委員会

1) 広報用リーフレットを改訂し、2025 年度版を作成した。

主に薬学生を対象とした広報用リーフレット（入会案内）を改訂し、全国の薬学部および関連団体などに配布した。

2) ホームページを全面改訂し、公開した。

本学会ホームページを全面的に改訂し、2024 年 12 月に公開した。サイトの構造や仕様を見直して掲載内容を充実させるとともに、ユーザーエクスペリエンスの改善を図った。また、将来的な拡張性を考慮し、会員マイページ（会員管理システム）や SNS との連携を図ることが可能な仕様とした。

3) 「病態を理解して組み立てる 薬剤師のための疾患別薬物療法」の改訂に向け、出版小委員会において検討した。

4) 出版小委員会における活動

編纂方針、総論ならびに各論の内容を検討し執筆要領を策定した。出版小委員会委員が編集担当者として各論を分担し、執筆者の選任ならびに執筆依頼を進めた。

(15) 会員委員会

- 1) 休会届を審査して認定した。
- 2) 会費未納者から提出された会員資格継続の嘆願を審査し、理事会に諮った。
- 3) 会頭からの諮問事項を検討した
- 4) 会員ニーズ、学会活動への参画状況やライフイベントが学会活動に与える影響を把握するための会員アンケートの企画および具体的なアンケート項目を検討した。

(16) 総務委員会

- 1) 2023 年度事業報告の草案を検討した。
- 2) 2025 年度事業計画の草案を検討した。
- 3) 年会の組織委員会に参画し、年会長と理事会および学会事務局との連携を推進した。
- 4) 働き方改革・感染対策等を念頭にいた学会運営・会議等の電子化を推進した。
- 5) 諸規程の整備・定款見直しの必要性を検討した。
- 6) 事務局体制の強化を検討した。

7) 小委員会の活動

①年会運営実行小委員会

年会長を交えて、年会運営に関する必要な事項を共有・検討した。

②年会長候補者推薦小委員会

第 38 回年会（2028 年開催）の年会長候補者として、石井伊都子（千葉大学医学部附属病院 教授・薬剤部長）を選出した。

(17) 財務委員会

- 1) 2023 年度決算報告書を取りまとめた。
- 2) 予算の執行状況と適切性を監視した。
- 3) 年会の組織委員会に参画し、年会長と理事会および学会事務局との連携を推進した。
- 4) 2025 年度予算案を作成した。

(18) 功績賞・振興賞選考委員会

① 功績賞（受賞者 2 名）

- ・ 出石 啓治 （いずし薬局）
- ・ 奥田 真弘 （大阪大学医学部附属病院）

② 振興賞の受賞該当者なし。

(19) 学術関連賞選考委員会

- 1) 日本医療薬学会賞等選考小委員会、Postdoctoral Award 選考小委員会、医療薬学誌論文賞選考小委員会および JPHCS 誌論文賞選考小委員会の各委員会にて一次選考された候補者について、二次選考を行い、理事会に諮り下記の受賞者、受賞論文を決定した。
- 2) 2024 年度の各学術関連賞の応募書式を改訂し、受賞歴の情報や応募者と推薦人の関係性が分かりやすくなるよう整備した。

① 日本医療薬学会賞（受賞者 1 名）

- ・ 齋藤 秀之 (熊本大学病院)
研究題目 腎病態形成におけるインドキシル硫酸産生責任酵素・硫酸転移酵素
SULT1A1 の毒性薬理学的役割究明を機軸とした創薬展開
- ② 学術賞 (受賞者 2 名)
 - ・ 辻 大樹 (静岡県立大学)
研究題目 制吐療法の個別化を指向した多機関共同研究の実践
 - ・ 松元 一明 (慶応義塾大学)
研究題目 抗感染症薬の個別最適化を目指した基礎・臨床研究
- ③ 奨励賞 (受賞者 4 名)
 - ・ 加藤 秀雄 (三重大学医学部附属病院)
研究題目 基盤および臨床研究との統合解析による抗微生物薬の適正使用支援
に関するエビデンス創出
 - ・ 菌田 晃弘 (出水郡医師会広域医療センター)
研究題目 高齢者における薬物療法最適化に関する医療薬学研究 ―地域医療に
関わる病院薬剤師によるエビデンス創出―
 - ・ 田中 遼大 (大分大学医学部附属病院)
研究題目 スペシャルポピュレーションにおける薬物療法の最適化を目指した
 - ・ 藤井 宏典 (岐阜大学医学部附属病院)
研究題目 がん薬物療法の治療効果の向上を目指した有害事象対策の構築
- ④ Postdoctoral Award (受賞者 10 名)
 - ・ 五十嵐 裕貴 (医療法人社団緑成会 横浜総合病院)
学位論文題目 β -ラクタム薬/ β -ラクタマーゼ阻害薬の併用療法における in
vivo pharmacokinetics/pharmacodynamics 評価方法の構築
 - ・ 石川 雅之 (千葉大学大学院薬学研究院)
学位論文題目 薬物中枢移行性の変動を考慮した中枢神経疾患に対する薬物療
法に関する研究
 - ・ 梅原 健吾 (国立病院機構 北海道がんセンター)
学位論文題目 悪性腫瘍患者における実臨床データを用いた薬物治療に影響を
与えるリスク因子に関する研究
 - ・ 大仁田 哲修 (島根大学医学部附属病院)
学位論文題目 作用標的部位での薬物動態/薬力学モデル解析に基づくアンピシ
リン - スルバクタム配合剤投与法の個別化
 - ・ 高橋 宏彰 (岩手医科大学)
学位論文題目 抗上皮成長因子受容体抗体薬に起因する皮膚障害の重篤化予測
に関する研究
 - ・ 竹村 美穂 (京都大学医学部附属病院)
学位論文題目 難治性がん疼痛に対するオピオイド選択基準ならびにその安全
な使用法の提案
 - ・ 出口 粧央里 (北里大学)
学位論文題目 湿式ビーズミル法を核としたナノ点眼剤の開発と眼組織を介し
た薬物送達システムへの展開

- ・ 中野 祐樹 (社会福祉法人 恩賜財団 済生会支部 福岡県済生会二日市病院)
学位論文題目 日本の二次救急病院における SCCmec type II および type IV
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌の臨床的特徴と感染に関連する因子：
単施設後ろ向き観察研究
 - ・ 増井 翔 (慶應義塾大学)
学位論文題目 リアルワールドデータ解析に基づく抗 TNF- α 抗体医薬品の適正
使用に関する研究
 - ・ 三澤 可奈 (岡山大学病院)
学位論文題目 肺 Mycobacterium abscessus complex 症に対する β ラクタム系
抗菌薬を基盤とした新規併用療法の開発
- ⑤ 医療薬学誌論文賞 (受賞論文 3 編)
- ・ 論文題目 HIV 外来診療における協働意思決定に基づいた継続的な薬剤師介入の
影響
著 者 成田綾香, 島田泉, 鈴木直人, 外山聡
(医療薬学 Vol. 49, No. 2, 39-50)
 - ・ 論文題目 新生児薬物離脱症候群を発症する薬剤に関する解析
著 者 世永由里子, 伊東明彦
(医療薬学 Vol. 49, No. 5, 185-193)
 - ・ 論文題目 薬剤師-看護師主体の認知症ケアラウンドの活動とその減薬への効果
著 者 森光輝, 木村美智男, 吉田光代, 富田顕旨, 宇佐美英績
(医療薬学 Vol. 49, No. 12, 434-441)
- ⑥ JPHCS 誌論文賞 (受賞論文 3 編)
- ・ 論文題目 Population pharmacokinetics and limited sampling strategy for
therapeutic drug monitoring of mycophenolate mofetil in
Japanese patients with lupus nephritis
著 者 Tomoko Mizaki, Hironobu Nobata, Shogo Banno, Makoto
Yamaguchi, Hiroshi Kinashi, Shiho Iwagaitsu, Takuji Ishimoto,
Yukiko Kuru, Masafumi Ohnishi, Ken-ichi Sako and Yasuhiko Ito
(JPHCS 2023 9:1)
 - ・ 論文題目 Investigation of appropriate needle length considering skin
thickness with the real injection posture for insulin
injections in diabetic patients
著 者 Aya Torii-Goto, Kana Hirai, Yuri Inukai, Yoshimi Hoshina,
Kazumi Shiomi, Junko Ito and Masae Yoshikawa
(JPHCS 2023 9:19)
 - ・ 論文題目 Significance of pharmacist intervention to oral
antithrombotic therapy in the pharmaceutical outpatient clinic
of cardiovascular internal medicine: a retrospective cohort
study
著 者 Tomoko Kurimura, Kazuhiro Yamamoto, Hidekazu Tanaka,
Takayoshi Toba, Takeshi Kimura, Yasushi Habu, Kotaro Itohara,

(20) 選挙制度委員会（代議員選挙管理委員会、代議員候補者推薦委員会）

- 1) 代議員選出規程の一部を改訂し、推薦代議員候補者の推薦に柔軟性を持たせた。
- 2) 2025-2026 年度代議員候補者の選出
 - ・ 2025-2026 年度代議員選挙の実施に向け、2024 年 10 月 10 日に本選挙を公示し立候補者を募集した。
 - ・ 2025-2026 年度代議員選挙の立候補者を除く形で、推薦代議員候補者の選出を進めた。
 - ・ 本選挙の投票期日を 2025 年 2 月 13 から 27 日までに設定し準備を進めた。

(21) 利益相反マネジメント委員会

- 1) 利益相反（COI: Conflict of interest）の申告対象者の利益相反状態を確認した。
 - ・ 本学会の利益相反マネジメント規程に基づき、対象者に対し自己申告書の提出を依頼し（2024 年 10 月 1 日）、対象者 287 名全員から提出を得、利益相反マネジメント委員会において当該規定に則り利益相反の状況を確認した。
 - ・ 数名の利益相反の申告があったが、疑義もしくは社会的・法的問題に抵触するような重大な利益相反は認められず、その旨、理事会に報告した（2024 年 12 月 26 日）。
- 2) 申告書類の保管管理を行った。
 - ・ 提出された申告書は事務局がドロップボックスで保管、利益相反マネジメント委員会が利益相反の状況をドロップボックス上で確認した。なお、ドロップボックスはアクセス権を限定し事務局にて厳格に管理している。
- 3) 規程を見直し一部変更を行った。
 - ・ 新たな申告対象者として、その他として、会務の遂行上、会頭または理事会が利益相反に係る申告が必要と判断された者を追加し、理事会で承認された（2024 年 12 月 26 日）。

(22) 日本薬系学会連合への協力

2024 年 2 月に一般社団法人化日本薬系学会連合となった。本学会より、同連合の役員や委員として活動に参画し、組織体制の検討などに努めた。

(23) 日本学術会議への参画

日本学術会議協力学術研究団体の一員として、継続して同学術会議の活動に参画している。

(24) 人事委員会

事務局職員 1 名を契約職員から正規職員に登用する面接を実施した。

9. 令和 6 年度がん専門薬剤師集中教育講座

配信期間 2024 年 11 月 1 日（金）～12 月 20 日（金）

開催形式 オンライン・オンデマンド配信

<プログラム>

● 必須講義

「がん薬物療法の臨床薬理」

立命館大学 薬学部 准教授 野田 哲史

「支持療法」

日本大学医学部附属板橋病院 薬剤部 技術長補佐 葉山 達也

「がん薬物療法の臨床試験」 名古屋大学医学部附属病院 化学療法部 教授 安藤 雄一

「安全ながん薬物療法の実践」

がん研究会有明病院 薬剤部 チーフ 横川 貴志

「緩和医療とがん疼痛治療」

医療法人社団悠翔会 くらしケアクリニック練馬 院長 田上 恵太

「がんの発生、転移、薬剤耐性」 がん研究会 がん化学療法センター 所長 藤田 直也

「悪性リンパ腫の薬物療法」 京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻 錦織 桃子

「胃がんの薬物療法」

九州大学大学院 消化器・総合外科 准教授 沖 英次

「肺がんの薬物療法」 国立病院機構 四国がんセンター 臨床研究センター長 上月 稔幸

「乳がんの薬物療法」

埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科 副診療部長／教授 石黒 洋

「大腸がんの薬物療法」 静岡県立静岡がんセンター 消化器内科 部長 山崎 健太郎

「肝臓、胆道がんの薬物療法」 国立がん研究センター東病院 肝胆膵内科 科長 池田 公史

「膵臓がんの薬物療法」 静岡県立静岡がんセンター 消化器内科 医長 大場 彬博

「泌尿器がん」 琉球大学大学院医学研究科 腎泌尿器外科学講座 教授 猪口 淳一

「婦人科領域がん(胚細胞腫含む)」 がん研究会有明病院 婦人科 副部長 温泉川 真由

「食道癌」

国立がん研究センター東病院 消化管内科 医長 小島 隆嗣

● 選択講義

「白血病、造血幹細胞移植」

北海道大学大学院医学研究院 内科系部門内科学分野血液内科学教室 教授 豊嶋 崇徳

「多発性骨髄腫」

埼玉医科大学総合医療センター 血液内科 教授 木崎 昌弘

「皮膚がんの薬物療法」

国立がん研究センター中央病院 皮膚腫瘍科 皮膚腫瘍科長 山崎 直也

「頭頸部がんの薬物療法(甲状腺がん含む)」

国立がん研究センター東病院 頭頸部内科 頭頸部内科長 田原 信

「放射線腫瘍学」

東京都健康長寿医療センター 放射線治療科 角 美奈子

「がんゲノム医療」 慶應義塾大学医学部 臨床研究推進センター 教授、

腫瘍センターゲノム医療ユニット長 西原 広史

「小児がんに関する疫学、診断、薬物療法」

国立病院機構九州がんセンター小児・思春期腫瘍科 医長 古賀 友紀

「原発不明がん」

近畿大学医学部内科学教室 腫瘍内科部門 講師 谷崎 潤子

「脳腫瘍」

杏林大学医学部脳神経外科学 講師 小林 啓一

「骨軟部腫瘍」

がん研究会有明病院 総合腫瘍科 副医長 仲野 兼司

◆参加者数 2,561 名

10. 第11回がん専門薬剤師全体会議

開催日 2024年5月11日(土)

開催形式 ハイブリッド開催(現地、オンライン:ライブ配信)

現地会場 はまぎんホール ヴィアマーレ（横浜市）

セッション1

「がん治療における未承認・適応外薬の取り扱いについて」

座長：鮎原 秀明、大橋 養賢、高田 慎也、松尾 宏一

「一般薬も含めた未承認・適応外薬の考え方（総論）」

済生会横浜市東部病院 菅野 浩

「がん薬物療法における未承認・適応外薬の考え方（各論）」

国立がん研究センター中央病院 腫瘍内科 下井 辰徳

「各医療機関での未承認・適応外薬への対応と取り組み（抗がん薬等の事例を含めた紹介）」

・ がんセンターの場合：国立がん研究センター東病院 米村 雅人

・ 大学病院（がん診療連携拠点病院）の場合：東京女子医科大学病院 深谷 寛
ランチョンセミナー（中外製薬株式会社 共催）

座長：藤田 行代志（群馬県立がんセンター）

「がん治療関連心機能障害（CTRCD）の診断と心不全治療」

国立循環器病研究センター 心不全・移植部門 部門長 泉 知里

セッション2

「がん専門薬剤師の魅力再発見！」

座長：有馬 純子、組橋 由記、谷川原 祐介、原田 知彦

シンポジスト：桂 英之（小松市民病院）

佐藤 信恵（国立病院機構 相模原病院）

橋本 浩季（松山赤十字病院）

山下 花南恵（神戸市立医療センター中央市民病院）

セッション3

「徹底議論でガイドラインを読み解く 制吐薬適正使用ガイドライン 2023 年 10 月改訂 第 3 版」

座長：池末 裕明、奥田 泰考、三宅 知宏

パネリスト：安部 正和（浜松医科大学医学部附属病院）

飯原 大稔（岐阜大学医学部附属病院）

沖田 憲司（日本海員救済会 小樽救済会病院）

林 稔展（福岡大学）

スイーツセミナー（アステラス製薬 共催）

座長：池田 龍二（宮崎大学医学部附属病院）

「胃がん薬物治療 2024～ビロイ®使用に対する薬剤師への期待～」

神奈川県立がんセンター 消化器内科（消化管）部長 町田 望

◆参加者数 455 名（現地参加：119 名、オンライン参加：336 名）

1 1. 第3回がん介入症例の書き方スキルアップセミナー

開催日 2024 年 2 月 10 日（土）

開催形式 オンライン開催（ライブ配信、グループワーク）

<プログラム>

「症例書き方のポイントについて」

がん専門薬剤師認定委員会委員長 池田 龍二（宮崎大学医学部附属病院 薬剤部）

がん専門薬剤師認定優秀症例受賞者 松谷 直樹（深谷赤十字病院 薬剤部）

柳内 亮祐（横浜市立みなと赤十字病院 薬剤部）

グループワーク

メディカルセミナー（共催 日本化薬株式会社）

「がん化学療法における最新制吐対策 ～エビデンスに基づく薬学的介入のポイント～」

座長：佐野 元彦（星薬科大学 実務教育研究部門）

講師：飯原 大稔（岐阜大学医学部附属病院 薬剤部）

グループワーク

症例発表

◆参加者数 26 名

1 2. 第 10 回がん専門薬剤師アドバンスト研修会

開催日 2024 年 2 月 17 日（土）

開催形式 オンライン開催（ライブ配信、グループワーク）

<プログラム>

症例検討 1「大腸がん」

講師：若槻 尊（がん研究会有明病院 消化器化学療法科 医長）

小林 一男（がん研究会有明病院 薬剤部）

メディカルセミナー（共催 日本化薬株式会社）

座長：奥田 泰考（がん専門薬剤師能力向上小委員会委員）

「後進の育成と新しい自分の見つけ方 ～がん指導薬剤師、52 歳男性の事例～」

演者：佐藤 淳也（湘南医療大学 薬学部 教授）

症例検討 2「肺がん」

講師：増渕 健（群馬県立がんセンター 呼吸器内科 部長）

新井 隆広（群馬県立がんセンター 薬剤部）

◆参加者数 32 名

1 3. 2024 年専門薬剤師認定取得のための薬物療法集中講義

配信期間 2024 年 7 月 1 日（月）～8 月 30 日（金）

開催形式 オンライン開催（オンデマンド配信）

<プログラム>

「肺高血圧症」 九州大学医学部研究院 循環器内科学 教授 阿部 弘太郎

「心不全」 九州大学大学院医学研究院 循環器内科 准教授 絹川 真太郎

「CKD の診断と治療」 岡山大学 腎・免疫・内分泌代謝内科学 教授 和田 淳

「COVID-19」 大阪大学大学院医学系研究科 感染制御学 教授 忽那 賢志

「がん化学療法の支持療法 [制吐薬適正使用ガイドライン]」

岐阜大学医学部附属病院 薬剤部 副薬剤部長 飯原 大稔

「酸塩基平衡異常」 大同病院 腎臓内科 副院長 志水 英明

「向精神薬と妊娠・授乳」 筑波大学 医学医療系精神医学 准教授 根本 清貴

「慢性閉塞肺疾患〔COPD〕」

広島大学大学院分子内科学 広島大学病院 呼吸器内科 准教授 岩本博志

「便秘と下痢」 九州大学大学院医学研究院 病態制御内科学 准教授 伊原 栄吉

「糖尿病」 川崎医科大学 総合老年医学 教授 杉本 研

「熱傷」 徳島大学大学院医歯薬学研究部 形成外科学 助教 峯田 一秀

「炎症性腸疾患〔IBD〕」

岡山大学病院 炎症性腸疾患センター センター長 平岡 佐規子

「褥瘡の発症機序と予防・治療について」

群馬大学大学院医学系研究科 皮膚科学 教授 茂木 精一郎

◆参加者数 720 名

1 4. 関係団体への協力（本学会役員）

- 1) 一般社団法人日本薬系学会連合 山本康次郎、石井伊都子：理事、奥田真弘：副会長
- 2) 一般社団法人薬剤師認定制度認証機構 奥田真弘：理事
- 3) 一般社団法人日本医療安全調査機構 医療事故調査制度への協力学会として登録
石井伊都子：統括責任者

<参考> 過去 20 年間の会員数の推移（2005 年～2024 年まで）

年度	正会員	学生会員	名誉会員	賛助会員	合計
2024	13,961	296	32	13	14,302
2023	13,896	254	29	13	14,192
2022	13,781	224	27	13	14,045
2021	13,750	230	27	14	14,021
2020	13,369	196	28	14	13,607
2019	12,510	237	28	15	12,790
2018	12,408	226	26	16	12,676
2017	12,090	199	24	17	12,330
2016	11,577	200	21	17	11,815
2015	10,794	154	17	17	10,982
2014	10,084	215	15	20	10,334
2013	9,536	184	13	22	9,755
2012	9,557	153	11	26	9,747
2011	9,181	220	11	26	9,438
2010	8,586	211	10	26	8,833
2009	7,831	205	10	27	8,073
2008	7,271	225	10	27	7,533
2007	6,589	185	8	27	6,809
2006	5,896	168	6	20	6,090
2005	5,160	162	3	22	5,347

注) 名誉会員は、物故者数を除く。

〔２〕 組織運営の部

１．2024-2025 年度 役員の選出

第 16 回定時社員総会（2024 年 3 月 24 日開催）の議を経て、2024-2025 年度役員（理事 20 名、監事 3 名）が就任した。任期は第 18 回定時社員総会（2026 年 3 月下旬頃の開催見込み）の終結まで。

２．2025-2026 年度 代議員の選出

第 17 回定時社員総会（2025 年 3 月 22 日開催）の終結後から第 19 回定時社員総会の終結時まで約 2 年間にわたり就任する代議員を選出するため、2024 年 10 月 10 日に 2025-2026 年度代議員候補者選挙の実施を公示した。

事業報告附属明細書

(2024 年 1 月 1 日～2024 年 12 月 31 日)

1. 役員 (2024 年 3 月 24 日第 16 回定時社員総会終了後から就任)

会頭

山本 康次郎 群馬大学医学部附属病院

副会頭

石澤 啓介 徳島大学病院

亀井 美和子 帝京平成大学

崔 吉道 金沢大学附属病院

理事

池田 龍二 宮崎大学医学部附属病院

石井 伊都子 千葉大学医学部附属病院

伊藤 清美 武蔵野大学

大井 一弥 鈴鹿医療科学大学

大谷 壽一 慶應義塾大学

川名 三知代 ココカラファイン薬局砧店

佐藤 淳子 独立行政法人医薬品医療機器総合機構

佐野 俊治 MSD 株式会社

関根 祐子 千葉大学

田崎 嘉一 旭川医科大学病院

豊見 敦 南海老園豊見薬局

中村 敏明 大阪医科薬科大学

花輪 剛久 東京理科大学

松元 一明 慶應義塾大学

宮崎 長一郎 有限会社宮崎薬局

村木 優一 京都薬科大学

監事

奥田 真弘 大阪大学医学部附属病院

富岡 佳久 東北大学大学院薬学研究科

望月 眞弓 元 慶應義塾大学

2. 事務局 (2024 年 12 月 31 日現在)

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 2 丁目 12-15 日本薬学会長井記念館 7 階

事務局長 1 名、職員 5 名、契約職員 2 名、派遣職員 1 名

以上、敬称略